「第18回日本臨床環境医学会学術集会」

(臨床環境18：63～66，2009)

梅雨空の狭間から、笑顔の未来が見えたでしょうか？

―第18回日本臨床環境医学会学術集会（岡山）を終えて―

第18回学術集会会長　大　槻　剛　巳

川崎医科大学衛生学

「創造 ── 笑顔の未来へ ──」というテーマの元に、平成21年７月３日（金）～４日（土）の２日間に渡って第18回日本臨床環境医学会学術集会を岡山市北区（平成21年から岡山市は政令指定都市になりました）山陽新聞社ビル内「さん太ホール」（ちなみに「さん太」というのは一般公募で決まったもので、山陽新聞の「さん」と岡山県は「晴れの国」ということでPRしておりまして…年間の晴天日数が全国１～２位です…太陽＝SUNにかけて命名されたそうです）にて開催させていただきました。会員の方々の多くは関東の方が多いのですが、梅雨真っ盛りの日程の中、100名を越える皆様にお集りいただきまして、無事学術集会を終えることが出来ましたこと、会員の皆様、ご参加の皆様の御蔭と篤く感謝いたします。本当にありがとうございました。なお、今回は第54回日本産業衛生学会･アレルギー免疫毒性研究会も合同開催とさせていただきました。

漠然としたテーマで、実はポスターやプログラム・抄録集の表紙に少女の写真を載せることを決めてからテーマをひねり出した、というようなことではなく、現在、医学医療関連の中でも、あるいは建築の分野においても、ひいてはマスメディアを通して一般社会的にも認知度が高まってきたシックハウス症候群や化学物質過敏症（医師国家試験の対象としても明記されております）ですが、実は病態の詳細や発症機転、治療について、まだまだ不明の部分も多く研究者は真摯にその解明と症例の救済に努力しなければならないと感じております。だからこそ、現在、そういった病気で苦しまれてらっしゃる方々に対して、あるいは昨今では電磁波についてもその健康影響や過敏症の存在などが認識されてきておりますが、これらはさらにその環境の状況そしてどのような部分で健康障害が惹起されるかなどは、まだまだ霧の中という印象ですから、そういった厳しい状況に置かれてしまってらっしゃる方々に対して、それでも医学医療建築学などの分野から、その方々への福音となるべき研究を進めていかねばならず、それは曖昧な言葉かも知れませんが、「笑顔の未来」を目指すことであろう、そのための研究であれ心のネットワークであれ、新たに「創造」していくことであろう、という想いを込めて冠させていただいたテーマだったのです。

日本臨床環境医学会が中心的に対象としていますシックハウス症候群や化学物質過敏症などは、多彩な症状が複合的に生じることが知られております。精神・神経・内分泌・免疫ネットワークの破綻という捉え方が出来るのかも知れません。しかし、こういったネットワークについても、昨今、脳科学などは一つのトレンドとなってはいますが、まだまだその複合的な病態について理解が深まっている、あるいは敷衍しているわけでもないというのが、正直なところでしょう。そこで今回の企画物（特別講演やシンポジウム）では、こういったネットワークのそれぞれの専門領域からの最先端のご講演をいただくことにより、参集された臨床環境医学の専門家たちは、それらをもう一度統合的に複合的に理解した上で、ネットワークの破綻について研究の新たな視点を構築することが「笑顔の未来の創造」にも必須ではないかという想いを込めまして、アレルギー・脳科学・精神疾

患そしてストレス科学をご専門とされ、昨今、目覚ましい成果を挙げられてらっしゃる先生方をお招きいたしました。

特別講演では、佐賀大学医学部分子医化学分野の出原先生に「アレルギー疾患の発症機序における環境要因の役割」というタイトルで、SNPs も含めた遺伝要因や免疫反応の最前線をお話し頂きました。またシンポジウムではまず川崎医科大学解剖学の樋田先生に「環境センサーとしての嗅覚」という題で、素晴らしい電子顕微鏡写真とともににおいといいう環境情報認知の機序を教示していただきました。続いて、国立精神・神経センター心身医学の安藤先生からは「女性の食行動の異常、摂食障害と環境・遺伝要因」と題して、シックハウス症候群や化学物質過敏症で観られる精神的な兆候とは異なるものの、非常にその対応の難しい摂食障害について臨床面そして研究面も含めて病態や治療に対してのアプローチの方策という色合いも含めてご説明いただきました。最後に、徳島大学ストレス制御医学の六反先生には「こころを映し出す DNA チップを用いたストレスゲノム研究」というタイトルで、最新のゲノム医学を複合的なストレス研究に如何に応用し、またその成果から何を学びどこを目指すかという観点について、示唆に富む内容をご紹介いただきました。

さて、拝聴した私たちは、実際に自らの研究に対峙する際にやはりあまりにも自身の視点を狭めたままでは、新たな発想の転換が得られにくい状況になり袋小路で右往左往という現状にもあります。これら招聘させていただきました先生方のご講演から、一度遠くで起こっている事象を間近で観る機会を与えていただいたと理解し、その立ち位置からもう一度それぞれの研究のベクトルについて考え直してみてもよいのかも知れません。時々は鳥瞰的な視点に自らを運んでみるという機会としてうまく活用して下さったとしたら、このような企画を編み出してみたことも意義があったと思っていただけるのでは、と考えております。

なお、２日目午後の市民公開講座は平成18年度から大槻が代表を務めさせていただいております科学技術振興調整費「アスベスト関連疾患への総括的取り組み」班との共同開催という形式を取らせていただきまして「アスベスト関連疾患の克服に向けて」と題して、内科臨床から岡山労災病院の岸本先生、外科臨床からは広島大学腫瘍外科の岡田先生にご講演頂き、基礎医学分野と班研究の紹介を大槻が行いました。ここでも50名近い一般の方々がお集りいただき、マスメディア的には少し下火になってきてはいますが実際に作業環境も含めた環境からの健康障害として問題となっており症例はまだまだ増加していっているアスベスト関連の悪性中皮腫について早期診断の重要性や外科治療の実際、そして将来に向けた医学研究について、出来るだけ分かり易い形式でご紹介いたしました。ご参加の一般市民の方々からも、閉会後のロビーでもいくつかのご質問や、また現状の理解の手助けになったなどのご意見も頂戴でき、充実した２時間に出来たことと感じさせていただいております。

一般演題は44題を頂戴いたしました。本学会では通常１セッション１会場で進行することになっておりますし、口演発表も十分な発表時間と質疑応答時間を組み込みたいと思っておりましたので、内容の区別なくポスター発表も設定させていただきました。そしてポスター発表では、他の学会では少しずつ普及しておりますが、質疑応答なく90秒で、そしてスライド１枚でご発表の概要をまずご説明いただく90 seconds presentation を企画いたしました。そのご発表を聴かせて頂いた後、全員でポスター会場に移動して閲覧・質疑応答をフリーに行うという形式でした。このためポスター発表の皆様には、事前に１枚のスライド情報を送付いただくというご面倒をお願いすることになりまして、恐縮でしたが、ポスター前で地声だけで発表するような形式や、あるいは何も発表なくフリーな閲覧だけで経緯するポスター発表に比べて、ご発表の最重要点を簡潔に、かつ的確に拝聴出来た印象もあったかと思っております。ご協力ありがとうございました。

そして、一般演題の中から「事例セッション」を設けさせていただきました。これは本来学術集会とは臨床環境医学に関連する学究の発表の場で

はあるのですが、本学会では従来患者さんや支援団体の方々の声を聴かせて頂く場も併わせて設けられていました。ただ、学究的な発表とそういったいわゆる生の声とは、やはりある趣が異なるのも事実ですし、患者さんの苦しみや生の声や調査について科学的検証の視点のみで評価することのすれ違い、あるいは学究的発表を現場にどのように応用するかについてはそれほど即時的な手段がないのが事実です。ですので、ここは舞台の違いを明らかにしてみてはどうかと、またこの事例セッションを聴かせて頂くにあたって、研究に立場を置いている者たちは、少なくとも病態研究に従事している限りその原点は対象としている健康障害に苦しまれてらっしゃる患者さんたちの生の声であることを、そして時にはその声に真正面から対峙する機会を避ける訳にはいかないであろう、という想いからこのセッションを企画したのです。ご発表いただいた方々には事前からおそらく不慣れな部分などでご面倒をお掛けしましたし、連絡などでも大変だったと思いますが、やはりこのような時間を設けさせていただいたことは本当に良かったと思っております。私は座長席で聴かせて頂いておりましたが、やはり胸に重いしかし確実な何かがずしりと残った様に感じております。この原点を忘れずに、私たちはそれぞれが中心に据えている病態研究、医学や環境の研究に邁進しなければならないのだという想い、勿論誰もがその想いを心の奥底に潜めているのですが、時には今回の様な形で、その想いをもう一度しっかりと取り出して、自らの掌全体でしっかりと触れてみて、そこから伝わる何かを思い出す、あるいは再確認するという作業として貴重な時間だったと思いました。重ねて事例セッションでご発表頂いた皆さまには、改めて感謝いたします。

このように非常に多くの様々のご発表の中で、例年のごとく会長賞と奨励賞を選定させていただきました。どちらの賞も基本的には日本臨床環境医学会がその中心に据えているシックハウス症候群や化学物質過敏症をその研究テーマとされていること、また口演とポスター発表についての差は付けないこと（このためにも90 seconds presentation をしていただきました）と考えました。会長賞としては、その内容の充実度とともにまだ臨床への応用という観点からは検討の余地があるものの新たな視点を提示していただいたということで奈良県立医科大学生理学の高木都先生の「シックハウス症候群関連化学物質の循環器系と心筋活動への影響」を選ばせていただきました。また、奨励賞は、大学院生を含めた若手の発表者で、今後も本学会でのご活躍が期待されること、そしてこれまでもご発表いただいていてその方向性が将来の臨床応用に役立つであろうという視点から北里研究所病院臨床環境医学センターの松井孝子先生の「化学物質過敏症評価のための重心動揺検査に関する基礎的研究」を選ばせていただきました。ぜひ、お二人には今後とも日本臨床環境医学会の中でもご活躍いただきたく思っております。副賞は大槻の好みのままに、現代アート絵画の小品を贈らせていただきました。これもお気に入り下されば幸いです。

さて、１日目の夜には、同じ山陽新聞本社ビルの９階の会議室で懇親会を催させていただきました。沢山のご参加をいただきましてありがとうございました。懇親会では、でも何か余興も欲しいのが常ですが、たとえば、会長の大学のオーケストラ部とか JAZZ バンドに依頼することもままあります。残念なことに川崎医科大学は学期制を採っていますので、この時期はちょうど１学期末の試験週間でした。で、一番廉価で済ますには、自分で何か演るしかない、ってことで、恥ずかしながら大槻がピアノ演奏とともにオリジナル曲（それも30年以上も前の曲）を披露させていただきました。折角の懇親会の料理の味を落としてしまったのではないかと反省しております。加えて、勢いに乗ってこれは2007年の年末に作った曲ですが、医学医療福祉の領域に進もうとする若人に贈る歌として「生命よ　美しくあれ」という曲も披露させていただきました。自分としては気に入っております曲でして、偶々2008年の大学祭では学生さん４人とバンド（おやじバンドならぬ親子バンド…年齢差）を組んでプレイしたり、その流れでちょうど会期の１週間前に自主制作 CD として

完成したばかりの曲でした。今回の学術集会では、ポスターや抄録集の表紙からもう会長の我儘勝手のし放題って感じになっていましたので（きっと顰蹙だったでしょうね？）、そのままの勢いで、受付では、このCDや記念に制作しました第18回日本臨床環境医学会学術集会記念Tシャツまで販売させていただきました。本当にすみません、恐縮です。御蔭様で好調な販売実績を得ることが出来ました。本当に感謝で一杯です。ちなみにTシャツは最後スタッフに配布して完了しましたが、CDは、まだまだ在庫を抱えておりまして、川崎医科大学衛生学のHP（http://www.kawasaki-m.ac.jp/hygiene/）を介して通信販売を実施中です。ご興味を持たれていただけます方には、ぜひ、アクセスの上、ご連絡くださいませ。

また今回の学術集会のウェブサイトは手作りでしたので、そのまま残しております。そして、たくさんのスナップ写真や、休憩時間に映写させていただきました後楽園や岡山城（烏城）のビデオもそのまま残しております。http://www.kawasaki-m.ac.jp/soc/18jce/に是非アクセスしていただいて下されば幸いです。よろしくお願いします。

こんな経緯で、２日間の会期が終了いたしました。丁度会期の週は、ほぼ日本列島全体が梅雨空と加えて南からの湿った大気の影響で、豪雨の被害の報道が届いてくるような時期だったのですが、幸いにも会期中は懇親会実施中以外、岡山地方は曇～晴れの空模様でした。

ご参加して下さった皆様、梅雨空の狭間から笑顔の未来を見ることが出来たでしょうか？

そしてあなたの耳元に、ぜひ、「生命よ　美しくあれ」を！